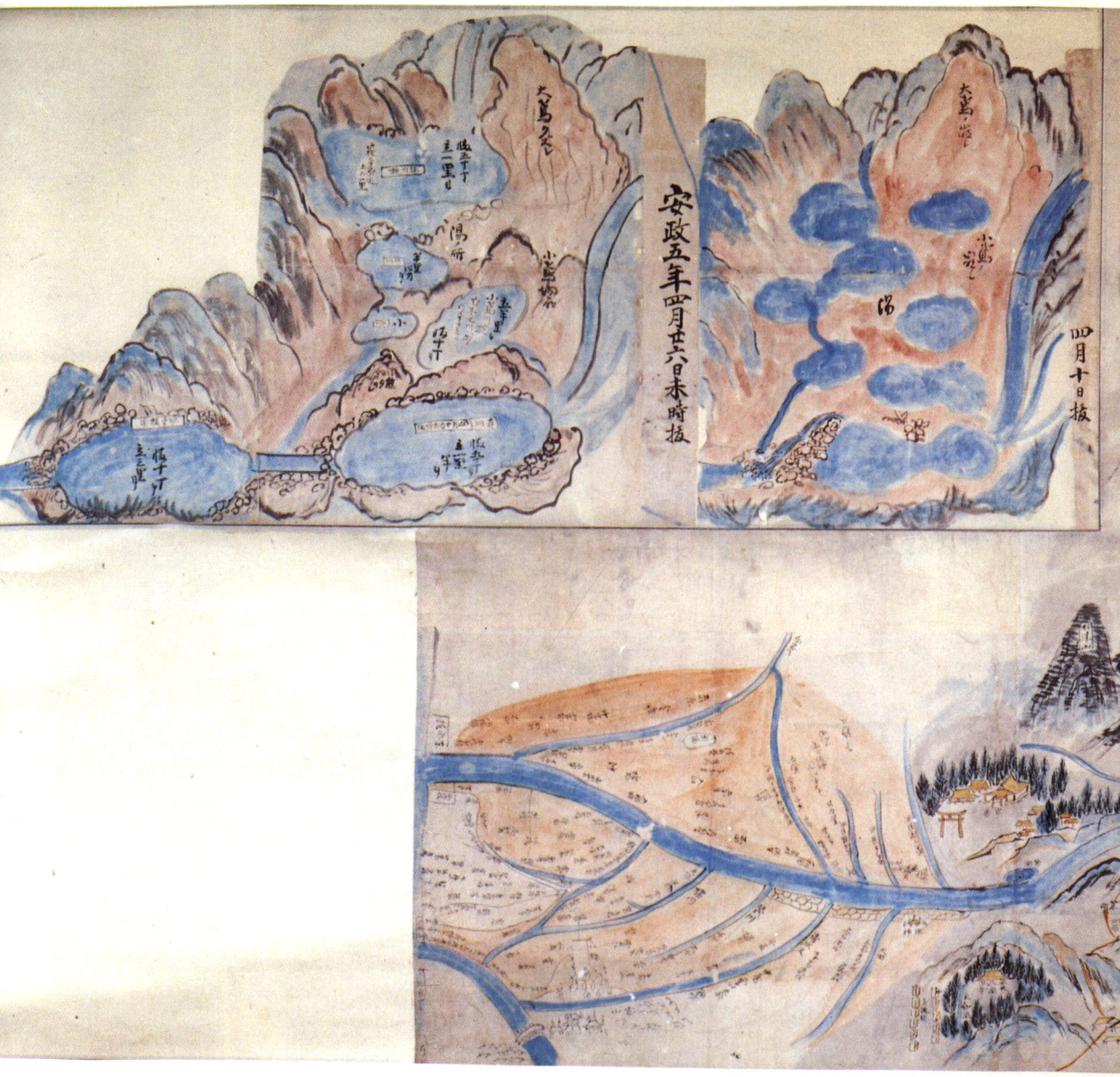
飛越地震

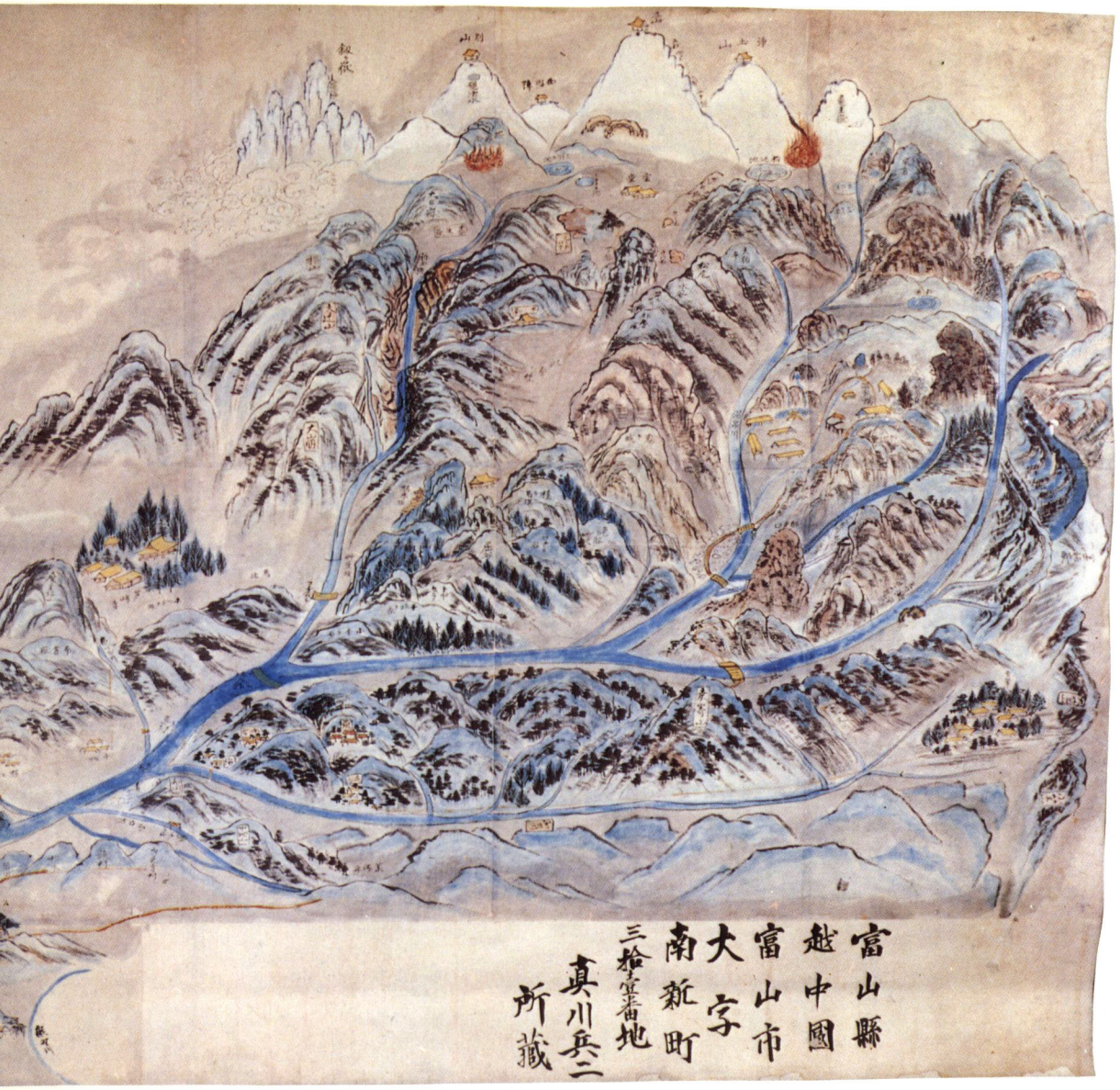
安政５年２月26日（1858年４月９日）午前１時ごろ、飛驒（岐阜県北部）と越中（富山県）を、M6.9の大地震が襲った。飛驒と越中の境、現在の高山の北、宮川・高原川沿いに被害が集中した。特に角川では戸数84、人口570人のところ壊45軒、半壊34軒、死者19人、傷者13人と全滅に近い被害であった。こういう村は川沿いに多く、被害率の大きい所は跡津川断層から10km以内であった。飛驒大野・吉城両郡70か村で、壊家709軒、死者203人、傷者45人に達している。越中でも所々で家がつぶれ、土中から水を噴き出したりした。土蔵は大部分破壊され、土壁は剝落し、各所で地割れが生じた。富山城の破損箇所も多く、土塀や石垣が崩れ、土橋が落ち、大樹が根こそぎ倒れた。町家の屋根に置いてあった用心水の大釜が三間(5.5m)飛ばされ、釜の水は一滴もこぼれずに隣の商家に落下したという。人々は思い思いに仮小屋を作り庭や道路にタンスや長持などを並べ戸障子で囲って夜露をしのいだ。

しかし、この地震は、地震そのものより地震によって引き起こされた泥洪水による被害の方がはるかに大きかった。立山連峰の大鳶・小鳶山と向かい側の松尾、水谷などの山々が崩れ落ち、そのばく大な岩石・土砂が常願寺川の支流である湯川をせき止めたのである。その他にも多数の山崩れがあり、随所で大水溜ができた。立山温泉は崩れ落ちた土砂岩石の下に埋まり、湯治客はいなかったが普請人夫30余人がその下敷きになったという。常願寺川のもう一つの支流真川の谷も土砂で埋まった。富山藩では決壊を考え、２月28日夜お触れを出し、御家中はもちろん商家末々まで避難させ、災害に備えた。翌３月10日真川が決壊し、せき止められていた水が一時に常願寺川を流れ下り富山平野を土砂で埋めた。さらに１か月半後の４月26日は、今度は湯川のせきが崩れ、再び富山平野は洪水に見舞われた。３月の洪水は常願寺川の東に被害が大きかったが、４月に襲った２度目の洪水は西側の被害が大きく、神通川にも流れ込んだ。この前後２回の泥洪水襲来で、富山藩領では18か村が被災、58軒が流失。最も被害の多かったのが加賀藩領（石川県南部）で、138か村が被害を受け、田地25,800石が荒地となった。流失家屋1,612軒、でき死者140人、流失土蔵・納屋など886軒、被災者は8,945人にのぼったという。（詳しくは本誌53年１月１日発行112号宇佐美龍夫著歴史地震から学ぶ①を参照されたい）

この図は縦93cm・横207cmの大図で、立山絵図、３月10日・４月26日の山抜状況図の３枚を合わせて一軸となっている。４月10日とあるのは３月10日の誤りである。（富山県立図書館蔵）



立山大鳶山抜絵図



富山縣
越中國
富山市
大字
南新町
三拾壹番地
真川兵二
所藏